

全国高校野球選手権大会

第104回

第2、3日

全国高校野球選手権大会第2日は7日、甲子園球場で行われ、八学光星、愛工大名電(愛知)近江(滋賀)鶴岡東(山形)が2回戦へ進んだ。八学光星の次戦は大会第7日の12日、愛工大名電と対戦する。

八学光星は創志学園(岡山)に7-3で快勝。12安打と打線がつながり、3人の継投で反撃をかわした。八学光星の勝利で、同選手権の風勢の白星が50勝に到達した。愛工大名電は14-2で星稜(石川)に大勝した。近江は鴨門(徳島)を8-2で下した。鶴岡東は聖進(広島)との点の取り合いを12-7で制した。

第3日は8日、1回戦4試合が行われ、天理(奈良)海星(長崎)市船橋(千葉)敦賀気比(福井)が2回戦に進出した。天理は山梨学院を2-1で下した。海星は日本文理(新潟)に11-0で快勝。市船橋は興南(沖縄)に5点を先行されたが8回に同点、九回に押し出し死球でサヨナラ勝ち。敦賀気比は高岡商(富山)に13-3で大勝した。

打の光星 快調12安打

【平】八学光星は四回、相手の失策と安打で1死1、二塁の好機を伺った。4番野呂の適時打と5番織原の犠飛で2点を先制。続く五回には代打奥名の安打など、二、三塁とし、中澤が右翼線に2点適時二塁打を放つと、4-1と突き放した。さらに八回、先頭で途中出場の成田が二塁打で出塁する

主砲野呂復活ののろし

と、野呂の適時三塁打のほか、池上、井坂、文元の3連打や相手のミスで3点を追加。創志学園の主砲岡村を打ち砕いた。投げては先発渡部が緩急を駆使した投球で、5回を投げて被安打5、1失点。六回以降は主戦佐平歩、福井への犠投で、再三のピンチをしのぎながら相手の追い上げをかわした。

「主砲復活」を告げる快音が甲子園球場に鳴り響いた。八学光星の野呂は四回初球で狙いを定めたスライダーを右翼線際にはじき返した。貴重な先制点をもたらした。青森大会では不振が続いていた野呂は、4番としての役目を果たし「ほっとした」と安堵(あんど)の表情を浮かべた。

青森大会では打率4割超も本調子とは程遠く、好機での三振や凡打もあり2打点とまじり。試合前、「県大会で迷惑をかけてしまった。甲子園ではチームを助けるバッティングをしたい」と話していた野呂。言い通り、打線を勢いづける一打で投手陣を援護した。

(野村通)

中澤執念流れ呼ぶ2点打

打つべき人が打った

八学光星・仲井監督の話とにかくうれし。打つべき人が打ってくれた。創志学園は春の中国王者で、非常に力のあるチームだった。

いい試合ができた

創志学園・長沢監督の話 強いチームといい試合ができた。サインをあまり出さなかったが、練習でやってきたことをキャプテンを中心によへやっつけてくれた。

2-1と1点リードして迎えた五回2死二、三塁の場面。八学光星の中澤は2ストライクと追い込まれた後、外角いっぱい直球に腕を伸ばした。すくい上げた打球は一塁の頭上を越え、右翼線に落ちる2点適時二塁打。「流れを引き寄せた一打だった」と喜んだ。

「追い込まれてからの粘り強さは誰にも負けない」と自負する唯一の2年生レギュラーはこの日、2安打2打点。仲井監督も「執念を見せてくれた」とたたえた。中澤は次戦に向け「青森県代表として恥じないプレーをする」と意気込んだ。(川越真也)

織笠「もっと打てた」

○：四回、先制した直後の1死一、三塁の好機に、左方向への機飛で1打点を挙げた八学光星の織笠。ただ、試合を通しては2打数無安打に終わり、「もつちよつと打てたかな」と悔しそうな表情を浮かべた。

守備では左翼を守る。創志学園側のスタンドが近く、「相手の応援でプレッシャーがすごかったけど、音楽に乗って守備もリズムに乗れた」と強心臓ぶりを発揮。「次は自分も打って勝利に貢献できた」とリベンジを誓った。

バックネット

八学光星・洗平歩主将「自分たちにとって初めての田子園。不安はあったが、何とか初戦突破できてうれし。」

富井投手(3番手で登板し、2回1失点)「2回戦以降もしんどい場面がチームにプラスになるような投球ができたらい。」

創志学園・岡村投手「最少失点で抑えていけたら、終盤逆転できる展開になったと思っ。勝ち上がった試合が良かった。」

た。悔しい

横井主将「二回につくったチャンスで最低でも1点先制したかった。再三のチャンスで取り切れなかった」

金田三塁手(3安打)「長沢監督から常日頃、おまえが打てば勝てるって言われてきた。その言葉が後押しになった」

竹本捕手(2年生。バックテリエラーが失点につながり)「自分のせいで負けてしまった。最後まで粘って投げてくれた岡村さんに申し訳ない」

気迫の救援リード死守

洗平歩
富井

ハイライト

4-2で迎えた終盤。2点差がありながらも、甲子園の独特の緊張感に包まれた八学光星の救援陣。創志学園の猛攻をしのぎリードを死守した。六回、先発渡部からマウンドを託された主戦洗平歩。四球で出した走者が犠牲で生還し、点差を詰められた。七回にも死球で走者を出し、直後に連打を浴びて1死満塁。洗平歩は「最少失点で切り抜ける」と開き直り、腹をくくった。迎えた中軸の岡村にはフルカウン

で切り抜けた。調子を戻したかに見えた洗平歩だったが、八回の先頭打者も四球。ここで仲井監督は富井をマウンドに投入。夏の県予選で初めてベンチ入りし、チームの窮地を何度も救ってきた富井は「自分の持ち味は精神力。仲井監督の期待に応えたい」とフル回転。カットボールとスライダーを器用に投げ分け、1死1、三塁のピンチを三振と中飛で守り抜いた。仲井監督は救援陣の投球について「気迫のこもった投球」「持ち味を十分に発揮してくれた」と評価。洗平歩は「次の試合は自分がみんなを助ける。富井は、どんなピンチでも抑えて流れを引き寄せる」と闘志を燃やした。八学光星の「継投」の軸を担う2人がチームの命運を握る。(川越真也)

先発渡部 投球術巧み

大事な初戦の先発を託された左腕渡部が「聖地」のマウンドで躍動した。創志学園の左の好打者4人にはスライダーを軸に、右打者には胸元を突く直球と外に逃げる

チェンジアップと、緩急をつけながら多彩に投げ分け、5回を被安打5、1失点と試合をつくった。序盤は、相手の主戦岡村の140メートルの直球と

キレのある変化球に打線がこずり、投手戦の様相に。渡部は「ロースコアだったので絶対に先制点を与えない強い気持ちで投げた」。チェンジアップは一曲たり落とそうとして、制球が定まらなかつた。ものの、中盤には指先の感覚を取り戻し、持ち味の制球力と幅のある投球術で要所を締めた。捕手文元との「変化球でカウントを取り、要所で直球」というプラン通りにはいかなかったが、ピンチを最少失点で切り抜け、主戦洗平歩につないだ。「とにかく勝てた」と満足げだった。(川越真也)



スタンド650人熱いエール

全国高校野球選手権の1回戦・八学光星―創志学園（岡山）が行われた7日午前、甲子園球場の一塁側アルプススタンドでは、光星の650人超の大応援団が拍手や演奏でナインを励まし、歓喜の瞬間を見届けた。

応援団は、ベンチ入りできなかった野球部員約150人と、生徒や引率の教諭約300人、部員の家族約200人など。OBら熱烈な光星ファン

八学光星が先制し喜びに沸く一塁側スタンド

球部の頑張りを、自分ももっと頑張らなきゃと思った」と刺激を受けた様子だった。

2019年の夏の甲子園に同校の3番打者として出場したOBの近藤遼一さん（天理大3年）は「甲子園は楽しめば楽しむほど実力以上の力が出る場所。今までやってきたことを信じて楽しんでほしい」とエールを送った。（野村遥）

八戸からも応援

光星留守部隊

八戸市の八戸学院光星高校では7日、運動部の生徒や教職員ら約60人がオープンスペースの大型スクリーンで試合を観戦、熱い声援を送った。

試合開始直後から、生徒たちはそろいの黄色いメガホンを打ち鳴らして応援。四回に4番・野呂の適時打で先制し、続く5番・織笠の犠飛で2点目を奪うと「よし！」「ナイス！」などと声を上げて喜んだ。

七、八回のピンチの場面では、主戦・洗平歩と富井が粘りの投球を見せて無失点で切り抜ける

と、生徒たちはほっとした表情を見せた。試合が終了すると、大きな拍手が起こった。

陸上部2年の田中愛友里（あゆり）さんは「互いに助け合いながらプレイする姿が印象的だった。自分は現地に応援へ行けないけど頑張ってるよ」とも面白い試合だった。次もたくさん打ってほしい」と話した。（相澤賢斉）